

## 教師の力量が発揮できる教育課程の在り方

—教師や児童が主体的に成長していける教育課程—

所属校：練馬区立大泉第二小学校

氏名：椿 田 克 之

派遣先：創価大学教職大学院

キーワード：教育課程・教師の力量形成・児童の学び・知識と理解

### I 研究の目的

多くの教育改革を受け、昨年度まで主幹（教務主任）として教育課程の編成に携わってきた。教師の資質向上、児童の学力向上の推進を念頭において学校改革を進め、校務分掌・会議の効率化、評価計画などの改善を行った。教育課程の改善を進めていく中で、教師と児童のどちらに主眼を置くか、何を根拠にして改善の展望をもつかなど迷うことも度々あった。そこで今回、教育課程とはどのようなものなのかを研究することとした。

そのためには、「教師の資質」「児童の学力」この両者の向上を推進し、よりよい学校にしていくための教育課程とはどのようなものなのかを明らかにしていく。その中で教師一人一人の力量が発揮できる教育課程の在り方について研究を行う。

### II 研究の方法

教育課程を考えていく上で、基本的なことから確認を行い、根本からの見直しを行う。「教育」とはどのようなことなのか。「教師の力量」はどのようにして形成されていくのか。「児童の学び」はどのように高まっていくか。これらを見据えたうえでよりよい教育課程とはどのようなものなのか。これらのことについて教職大学院の授業、文献調査などを通して自分なりの考えを明確にしていく。

さらにその教育課程の実施までの計画を立案し、法規や制度面で可能かどうかを考察していく。

### III 研究の結果

#### 1 「教育」とはということか

教育によって得られる知識や理解やその他の能力は、その教育を受けた者の財産であり生きるために必要な力である。学習指導要領でも「児童の人間として調和のとれた育成を目指し」とあるように、学校教育目標を受け、授業を通してどのようにして“人間として調和のとれた姿”へ導いていくかが大切だと考える。そこで人間のための、生きるための教育であるならば、人間という生物学的な視点から見て普遍的な要素があると考え、脳の発達視点で教育の必要性を追究するこ

ととした。その結果、言葉の理解や数字などの概念的な考え方を身に付けるには教育という行為が必要であり、さらにその新たな知識の獲得や理解力の向上という行為には、目の前の出来事に対して自身の体験と比較し、再構築し、他者からの新たな刺激などによって実感の伴ったものにしていくことが大切であるということがわかった。そこで「知識の獲得」と「理解する」ということをさらに追究した。

#### (1) 「知識の獲得」について

現在の社会では、意識をしなくとも受動的に知識が入ってくる。入ってきた知識の必要性によって重要度が決まりその人にとって価値ある知識となり獲得される。必要な知識をいかに価値ある知識にするかが重要になってくる。

その過程について組織的知識創造理論（野中郁次郎・竹内弘高『知識創造企業』）では、「個人・集団・組織の間で、相互に絶え間なく暗黙知（主観的・身体的な知）と形式知（客観的・理性的な知）を返還・移転することによって新たな知識を生み出す」また「すべての知の源泉は個々人の体験に基づく暗黙知であり、そのレベルで相互理解を進めていく中で形式知に変換され、言語化することでより概念的になり、本質理解が進み、新たな個人の暗黙知となる」と述べている。

つまり、知識創造・獲得は、“個々人の体験”から始まり、集団の中で相互理解を通して、価値づけられた知識として獲得するのである。このことが知識の習得であり活用であると考えた。

#### (2) 「理解する」について

さまざまな理論や授業の考察を追究していく中で「理解する」ということについても「他者」「集団」とのかかわりによって本当の「理解」となることがわかってきた。それは、「理解する」ということの出発点は自己の経験であり、外界からの刺激によってその体験が想起され、新たな発見をし、自分自身の中に深く解き明かされることが、本当の「理解」となるのである。また、「理解」ということは、自身の今までの体験や経験と新たな出来事との自発的な比較や追究によって実感が得られるものである。つまり、その自己の体験や他者からの刺激の過程を通して実感としてわ

かったことが、本当の理解といえるのである。

## 2 教師の力量形成について

教師は毎日の授業や教材研究、研究授業で質を高め、力量を形成していく。その研究授業において、教師同士の対話が行われ、授業を通した教師自身の省察が深められる。大学院の授業において「目の前の学習者に指導技術が適さないとき、自身の教育観や思考枠組を問い直す省察が求められる。それは、心理的な苦痛も伴うのであるが、そうした革新の次元を経て、教師は成長を遂げる」ということを学んだ。自身の教育観を省察するとき、多岐にわたる視点が必要となる。そのために事実を通した教師同士の話し合いによって切磋琢磨されていくと考える。大切なことは、自分の教育観をしっかりと見つこと、その考えや経験が発揮できる場所があること、身近に同僚がいること、そしてその教育観を問い直す機会があることである。

## 3 児童の学びについて

今の児童には、「真実性の実感」「自発的な問い」「可能性の追究」が欠けていると言われる。これは授業における教師の意図を児童は見抜き、教師の意に沿うような答えを探し始める傾向にあるためである。児童の主体性を高め自己実現を可能にさせる授業とは、児童の内面に目を向けた授業である。児童たち一人一人がどんなことを考え、何ができるようになりたいのかを理解し、支援する授業である。それには、児童が何を基準にしてどんなことを考えたかという学習の枠を越え、生活全体から児童を理解したり見守ったりする粘り強さが教師には必要となってくる。教師がこの姿勢で授業を行うことによって、児童の自己受容・他者受容が起き、守られた環境下での集団ができあがっていく。これによって個が活かされ個が伸びる集団が作られ、児童の学びが高まっていくと考える。

## IV 考察

教師が教育観をもって取り組む授業。児童が実生活の視点から意欲を高めていく学習。知識の習得・活用の能力育成。これらを達成するために「経験カリキュラム」と「教科カリキュラム」の融合が必要だと考えた。その融合したものを「人間教育カリキュラム」とし、「基礎学問の論理によって組織された教科を児童の実生活とつなげ、気づいた興味と目的をもった活動で構成」と定義づけ、教育課程をどのように改善していくかを考えた。この改善のために、教師は教科のねらいと願いをもって授業に臨み、常に自身を省察し、児童の生活を立脚点とし、児童とともに成長していくという視点をもって取り組んでいくことが大切だと考えた。この「人間教育カリキュラム」を推進していくこ

とによって、学校教育目標が目指す児童像からさらに具体的な形となって教師自身の目指したい児童像が明確になってくる。その実現のために、児童一人一人にあった身につけさせたい能力や取り組ませたい活動、考えさせたい生き方などが授業に反映されるようになってくる。さらに追究し改善を進めていくと、どの教科・領域に重点をおいてどんな単元構成で年間どのくらいの時間をかけて取り組んでいくか。また各単元で知識・理解のねらいと生き方のねらいを明確にさせた各学校独自のカリキュラムが展開されるようになると考える。このような「人間教育カリキュラム」を実施するためには、どのようにして教師の学びを深め、必要な力量を引き出していくか、段階的に教師の意識を改善する必要があると考え、次のようにまとめた。

1年目	「授業における児童の学びの深まり」を認識するための校内研修会を行う。
2年目	「児童の学びと教師の教育観・児童観」について研究授業を通して理解を深める。
3年目	「教師の教材観と児童の学び」を深め、教育観と学習環境の在り方を検証する。
4年目	教科・領域の位置づけを明確にし「人間教育カリキュラムの体現化」を進める。
5年目	全体で取組を基にした人間教育カリキュラムの実施と検証及び見直しを行う。

実際には学校の実情がそれぞれ異なるので、これを基本原則とし実態を考慮しながらの検証がこれから必要になってくる。

学習指導要領総則にある「児童の人間として調和のとれた育成を目指し」ということについて、学習指導要領解説総則編では、「まさに学校教育の目的そのものであって、教育課程の編成もそれを目指して行われなければならない。」とある。さらに「小学校教育の目標は、これらのすべての教育活動の成果が統合されてはじめて達成されるものである。」とある。教育活動の成果の統合には、教師の教育観や児童の日常生活の視点に立つことが必要だと考える。そのために授業において教科単元目標に留めるのではなく、その教科単元を通して何を学んでほしいかという願いを教師がもつことがとても重要である。その願いが教育活動の成果を統合するための“のりしろ”であり、児童の日常生活が各教科・領域の学習をつなげる“のりしろ”になると考える。

教師一人一人の教育観を基にした授業が行われ、常に省察と更新をする場がある学校。これによって、教師一人一人のよさが発揮されていくと考える。教師の力量がどのように発揮され、教師が成長し、児童が成長していくかという検証が、今後さらに必要である。